記者席から

取材者でよかった？

共同通信　岡部（おかべ）　智也（ともや）

この6月まで、共同通信と加盟新聞社の合同企画「地域再生」の事務局を担当していた。地域の元気を回復しようとする取り組みを加盟各社が交代でルポする連載企画で、地域に密着した地方新聞社ならではの記事を共同の配信システムを使ってほかの地域の読者にも届けるのが目的だ。

「暗い話は普段の記事で十分」と感じている加盟社の担当者は多いらしく、企画で取り上げるのは、高齢化が進んで限界集落になったとか、公共交通機関の撤退で不便になっているといったたぐいではなく、疲弊を乗り越えようと奮闘を続ける住民らの前向きな話。企画を通じて地域再生の好事例をほかの地域にも広げてゆければという願いもある。

例えば、四万十川支流にある高知県の山あいの地区は、住民が出資した株式会社が日用品の販売などを手掛け、交通手段を持たない高齢者の生命線を維持。福島県喜多方市では、商工会議所が主体となって「微生物ハンター」を結成し、酵母、乳酸菌など新種の微生物を探してみそやしょうゆ、日本酒など醸造品の新開発につなげるプロジェクトが進行している。地元大学に通う外国人留学生たちが担い手の少なくなった伝統の祭り継承に一役買っているという秋田市の話もあった。

連載とともに、加盟社が推薦した各地のNPOや会社の代表、大学教授、自治体関係者らが参加する「地域再生列島ネット」も立ち上げた。まちづくりや観光、教育などの分野で活躍する地域再生の名人ともいえるメンバーがそろい、「どうしたら文化で飯が食えるか」、「自分が自治体トップになったら」などのテーマに沿って電子メールで意見を交換し、毎回ユニークな提言が寄せられている。

個人的に楽しみにしていたのは、メンバーを訪ねて全国各地を歩いて回ることだ。「主役は地域の人々。やりたいことを黒子として後押ししたい」（まちづくりを支援する会社役員）、「地元産品の市場を海外に広げ、人口が減っても生き残ってゆきたい」（西日本の県幹部）、「歴史を掘り起こせば地域づくりのヒントが隠されている」（中世史が専門の大学教授）。取材のたびに得心を重ね、時に酒を酌み交わしながら夜遅くまで議論が続いたことも。

ただ、列島ネットのメンバーと加盟新聞社の各氏とも、東京発の情報や視点に偏りがちなメディアの現状を残念がっていることに気付かされた。もちろん日常の活動はそんなことは気にせず前向きに取り組んでいるのだが、地方が感じている不安や不満、あるいは期待や希望が中央のメディアには十分に吸い上げられていないもどかしさを感じているようだ。

そこは反省しなければならないが、中央省庁の取材に戻ると、話す相手は霞ケ関で机に向かう人が多いので、いきおい自分の関心も政府が何を決めたのかに移ってしまう。地域が何を必要としているのか。中央が判断、決定する政策で地方はどんな影響を受けるのか。地方の立場を伝えてほしいと各地で聞かされた言葉を忘れがちになる。

「私も一度取材する方をやってみたい」。先日、中央省庁の担当者がこう言い出したので、「私こそ取材される側になってみたい。教える方が断然楽しいでしょう」と応じたら、瞬時に答えが返ってきた。「そちらには結論しか見えなくても、そこに至る検討や調整って大変なんですよ」。

昼夜を分かたずに続く検討や調整にも今はやりの〝無駄〟がないとは言えないのかもしれないが、関係者の苦労を思えば、自分の中ではやはり取材者の方でよかったという結論に一応、達した。

ならば、地方の「声なき声」に耳を傾けるのはもちろん、中央の政策決定の裏にある複雑なプロセスの観察も地道に続けていかなければならない。